

箱の中の私

体験版



壺

巨道空二

目次

ご注意	4
登場人物紹介	5
第〇話 私の名前	6
第一話 お風呂で	29
1 日々のシゴト	29
2 お風呂で	38
第二話 エッチなこと	45
1 追憶と悪夢	45
2 寢床で	52
第三話 おみやげのある日	66
1 彼のおみやげ	66
2 チロ	76

体験版は第〇話のみ全体を掲載しております。第一話以降はお話の前半部分までとなっております。ご購入に繋がれば幸いです。

ご注意

このお話には悪人は出てきません。苦痛や肉体を傷つけたりも扱いません。あくまでも、事故で四肢の一部を失ったヒトと、そのパートナーとのラブラブな生活とエッチを描いていきます。

傾向としては、いわゆる四肢切断よりは拘束、羞恥、自縛に近いかもしれませ
ん。

ご自分の性癖、好みにより評価が分かれると思いますので、ご注意ください。
いささかニッチではありますが、その割には好意的な意見をいただいている作品
です。お楽しみいただければ幸いです。

登場人物紹介

私　愛称　サナ　本名　美沙奈（苗字の設定なし）

本作の主人公。もともとは普通の身体だったが、事故で肘、膝から先を失う。妄想癖の傾向はあるものの、まじめ、かつ前向き。ただ、四肢を失ったことから完全に立ち直っているわけではないので配慮が必要。

彼　愛称、本名設定なし。

主人公のパートナー。性癖を除けば完璧超人っぽい。スペックは資産家の息子で体形、顔などは普通。なかなか立ち直れず、リハビリに背を向ける主人公を説得するために多くのモノを投げうった。

可愛いコをいじめたくなる、よくある男の子属性を持つ。

第〇話 私の名前

雑踏の中、彼は本を読んでいる。背中越しに彼の体の暖かみが伝わってくる気がした。私は彼の温かさを背中に感じながら、道を行き交う人々を見ていた。

活気にあふれた、猥雑な、エネルギー溢るな街の風景。こうして外に連れ出されるのはせつない。他の人たちとの違いを思い知らされるから。

私と彼は、二人でベンチで時を過ごしている。けれど、私に気づく人はいない。私は、いない人間なんだから。

汗ばんだ肌をぬぐいたいけれど、今の私にはそれもできない。足を組んで姿勢を変えることすらも。ただ、彼のそばにいただけ。

彼が薄手のジャケットのポケットから通信端末を取り出して、何かをつぶやいた。文庫本は膝の上で、開いたまま伏せているのだろう。ふんふんとうなずいた青年は端末をしまうと、また文庫本を取り上げてページをめくっていく。

紙の本、ずいぶん読んでないなあ。

彼のページをめくる音が聞こえた気がして、思わずページを見つめてしまったけれど、私の位置からは読めなかった。溜息をついて周囲の風景に視線を戻す。外、久しぶりだな……。

私はじつと街をいきかう人々を見つめ続ける。いましめられた体をよじらせながら……。

たまに私に目を止める人がいるが、それだけだ。その視線は私の後ろの彼に移ると納得したかのようにうなずき、立ち去ってしまう。でも、それだけのことですら私の胸は切なく高鳴る。

手も、足も私を守ってくれない。私のからだはただ密やかに、誰にも気づかれずにここにある。私は人々の無関心の中の、ごくまれな私への視線に自分の胸を抱きしめたくなくなるようなもどかしさを感じる。

……見られている……！

もちろんそんなわけではないのだけれど、その感覚は私を熱くさせる。私の胸の膨らみは重たげに揺れ、その頂点の小さなつぼみは、頭をもたげ存在を主張する。

私のむき出しの肌はうっすらと汗に湿り、むせ返るような若い雌の匂いがたち

こめる。

思わずからだをよじった私は、下腹部にせつなさを感じた。そういえば、トイレに行かないまま出かけてきてしまったのだ。

(いけない。こんなところで……)

尿意というのは、気づかなければそれなりに持つものだけれど、いったん気づいてしまうと我慢しづらいもの。私は自分のうかつさに悲しくなり、唇をかんで我慢することになった。

ふだんと変わらない街を行き交う人々の姿を見ながら、ただ彼が本を読み終わるのを待つしかない。そう思うと、先ほどまでは興味深く、また懐かしくてじつと見ているのも楽しかった雑踏の風景が、だんだんとうとましくなってくる。

じわり、じわりと水位をましていく尿意。いっこうに本を読み終わる気配のない彼の姿に悲しくなってしまう。

はあ、はあ、はあ……。

いつの間にか、肌を濡らす汗は尿意をこらえながらの焦りの汗に変わっている。そんな自分が恥ずかしくも口惜しく、私はひたすらに耐えようとする。

私は雑踏の中、肌を汗でぬらしながら身悶えていた。できれば、家に帰りつくまで我慢していたい。そう思ったのが裏目に出てしまった。

身体をよじると私の腕を固定しているリングと鎖が涼しげな金属音をたて、私は電気に打たれたように動きをとめる。無力な、恥ずかしい姿の女がここにいるなんて誰にも気付かれるわけにはいかない。

すう、はあ。すう、はあ……。

深呼吸してみる。心を落ち着かせる効果があるはずなのに、今は肌の感覚がよりくつきりと、鮮やかに浮かび上がってしまう。かすかな空気の動きが産毛をくすぐり、肌を撫であげる。

びくん、と肩が震えた。いや、身体全体が難くなる。下腹部の張り詰めた感覚がまた少し厳しくなる。

（おトイレ、行きたいのに……）

むき出しの肩が、背中が熱く火照り、胸の双丘は重たげに揺れる。かすかな動きにも尿意は少しずつその水位をあげていく。この人々が行き交う雑踏の中で。誰にも気づかれぬまま、私の羞恥はすでに引き返せぬところにまできてしまった。

いた。

固定された両腕と両足。私の思うにまかせぬ無力な四肢。繋がれたままの四肢をふるわせ、身体をくねらせながら私は我慢を続ける。私は何一つ身につけていない。この身体を飾るのは、拘束するためのベルトと鎖だけ。

私がせつなく身体をよじり、汗で身体を濡らしているのに、彼はまだのんびりと本を読んでいる。憎らしくなったけれど、トイレに行きたいというものはばかされた。二人で出かけるなんて、最近では滅多にないことでもあったから。

こんな恥ずかしい、切ない状態であつても私の女は存在を主張する。白い肌は内側からわきあがる欲情に熱く燃え、乳房は優美な曲面の頂点を固く突起させている。そして、私の下腹部の奥では欲情が重くしこり、女の部分はジクジクと熱いオツユを滲ませてしまう。

「あ……」

風が私の熱く火照った肌をなでる。産毛がザワザワとざわめくような快感に私は震える。じいん、と下腹部の奥の器官が限界が近いことを知らせてくる。この街の、人通りも盛んな街の一角で。私は胸を、腰を、そして恥ずかしさのかたま

りであるこの体をむき出しにして、人知れず尿意をこらえる。

私は恥ずかしいことに、ただこれだけのことにすら発情しきっていた。誰も、私に気づく人はいないのに。このむき出しの肌に気づく人などいないはずなのに。衣服を身に着けていない、というのは今の社会では異常なこと。気づかれないからといって、素裸で家の外にいていいわけがない。そんな当たり前前のが、恥ずかしさが、私の中の羞恥と、何かエツちな部分を刺激している。

やだ。これじゃ、変態さんみたいじゃない……。

そう。雑踏の中で感じちやうなんて、おかしいし。しかも、裸でなんて。そんな風に自分に言い聞かせようとしていたところに、ふっと浸み込んでくる声。

「どうしたの？」

彼の優しい声。そう、彼だけは私に気づいてくれる。私を知っている人。私はくぐもった声で彼にお願いをしようとした。

「あの、あの……」

せっかくの、二人でのお出かけ。めったにない楽しいひとときのはずだった。

「どうしたの？」

私は言葉につまった。だって……。

「いつてごらん？」

彼はいつもの優しい口調で私をうながす。彼をごまかすことは、私にはできない。

「うん……。おトイレに行きたいの」

背中越しに彼が笑った。

「ああ、トイレに行きたいんだ」

「そ、そうなの。おトイレに行かせて？」

太腿をすりあわせながら、無意識のうちに内股になっていることに気づいた。拘束されている私は、彼が行かせてくれなくては、一人でトイレにも行けないのだ。

「トイレかあ。ちょっと遠いなあ」

コンコン、と彼が指で私を叩く。そのリズムが伝わるだけで下腹部に張り詰める感覚がせつなく波だってしまう。

「ご、ごめんなさい。でも、もう我慢できないの」

彼の声は小さい。もちろん、道行く人に聞こえないようにだ。私の声も最低限のささやき声。たぶん、通り過ぎる人たちはまったく気づいていないだろう。

「ね、ねえ、おトイレ……」

そう言っている間にも尿意は少しずつ増し、私の哀れな膀胱は少しずつたまつていく尿に水風船のようにふくらみ、はじめてしまいそうだ。

「ああ、そうか。出かけるときに済まさなかったのか。忘れてたよ」

彼の指が滑り、そのかすかな振動がいましめから私の身体をに伝えられる。彼は自分の指が私に対してどう働くのかわかっているはずなのに。

ぶるっ……。

下半身が痙攣する。一瞬だけなのに、その筋肉の緊張は膀胱がお小水でいっぱいになっていることを自覚させるのには十分な刺激だった。

「そ、そうなの。だから、おトイレに……」

すでに肌は汗ばみ、うっすらと湿っているほどなのに彼は涼しい顔をしている。ちよっと憎らしいほどだ。それはそうだろう。彼は自分の足でトイレに行けるし、自分の手で用も足せるのだ。

「ん……いじめ、ないですよ」

「いじめるつもりなんかないよ」

彼に悪気はない。だって、今日のおでかけも私がおねだりしたもの。服をつけていないのは、急いでいたからもあるけど。というか、今の私は自分では服を着られないし。

「声が震えてるよ」

彼の囁き声は私にしか聞こえない。

「そ、その。我慢、できないの……だから」

かすかなうめきが、私の薄めの唇からこぼれた。そうだ。私は自分でおトイレの後始末もできない。彼にしてもらわなければ、何一つできないあわれな存在だった。彼が私のお小水に濡れた股間を拭き清めてくれることを考えると、恥ずかしくて気が遠くなりそうになる。

「そうかあ。もう我慢できないのか。まいったなあ」

でも、彼は私の窮状には気づいてくれない。いつもどおりの優しい笑顔で、低めの声が私の鼓膜を甘く震わせる。彼はいつも、私のおトイレの後始末もしてく

れる。今更恥ずかしいことなんてないはずなのに、やっぱり羞恥が私の体を熱くする。

今だって、拘束されたまま、全身を隠すこともできずに雑踏の中に放置されている。それだけでも羞恥を刺激されていたのに、私はさらなる羞恥の予感に体の奥が熱く息づいているのを感じていた。

羞恥を振り切ったの放水の快感。彼の目の前でしたこと一度や二度ではない。私はそのたびに羞恥を味わい、はねあがる心臓を感じながら、彼の手に身をゆだねてきたのだ。

彼の手が私の股間にふれたとき、私の体は反応してしまうのではないか。今だって、体の奥がじつとりと潤ってきてしまっているというのに。さらなる羞恥のしたたかりに、彼は気づいてしまうかもしれない。

体を震わせる尿意の高まりに、私が羞恥の予感を感じているといつもと変わらない、優しい声が私の耳に入ってきた。

「大丈夫。そのまましてごらん」

一瞬、意味が通じなかった。そのまましてごらん。そのままって、どういうこ

と？

そのままって、このまま四肢を金具と鎖にゆだねたまま、彼の目の前で、この雑踏の中で？ まるで道端の石ころのように、このベンチのように道行く人の視線をさりげなく浴びながら。それが、そのままということ？

そのまましてごらん。その言葉は私を揺さぶった。頭がクラクラしそうだ。そのまましてごらん……。ソノママ、シテ、ゴラン。ソノママ……。！

その瞬間を想像した私は頬や耳から火が出るのではないかと思うほど真っ赤になった。全身の肌が燃え上がるような、いてもたってもいられないような感覚。じゅわ、と体の奥で熱い液体が染み出してくるのがわかった。

私は必死でそれを打ち消そうとする。

「でも、でも、音がしちやうもの」

「大丈夫。僕にしか聞こえない」

彼はこともなげに言い、私は焦ってさらに自分を追いつめてしまう。

「でも、でも、匂いがしちやうもの」

「すぐに消えてしまうよ。誰も気づかない」

私はすぐに追いつめられてしまった。そのとおりで。彼しか気づかないだろう。彼は私を追いつめるのが上手で、私はそれから逃れられたためしがない。

「でもでも、恥ずかしいもの。とつても恥ずかしいの」

私は甘えるように言った。こうなってしまった私にとっての唯一の選択肢。でも、彼は許してくれなかった。こちらをむいてこつん、と小さく私をこづく。彼の笑顔をこんな時でも、すごく優しく、私は困ってしまう。

「大丈夫だよ。僕がいるから」

そう言われてしまうと、私にはそれ以上抗うことはできなかった。

「うん、わかった……」

私は体の力を抜いた。あそこに意識を向け、すでに一杯になっているはずのダムの水門を開けようとした。

「ん、ん……」

私のどの奥で空気を飲み込む音がする。でも、できない。当たり前だと思っただって、目の前では沢山の人が歩いていているんだもの。こんをな一杯の人の前じゃ、おしっこをするなんて、恥ずかしすぎる行為だと思う。

(私、赤ちゃんじゃないもの)

人々の目の前で、湯気のたつ水溜まりの上で、震えているだけの私。逃げ出すこともできずに立ち尽くす私に注がれる視線。好奇と、蔑みと、そして憐れみの目。ひそひそと、人によってはかなり大きな声で私のことを口にしていく。

(こんな、ところで。人がいっぱいいるところなんだ)

私は耳鳴りがしているようで、彼らは何をいつているのかはわからないけれど、そのざわめきは私の体に染み込んで、わたしを変質させていく。その空想は非現実的なくせに圧倒的な迫力で私を圧倒する。

(無理だよ。こんなの……)

身体が萎縮する。ただでさえ小さい、無力な身体がこわばり、震えだしそんなところに優しい声がかかる。

「どうしたの？」

彼が文庫本を閉じ、私に向き直った。

「うん……できないの」

「出ないの？」

彼の声はすごく優しい。でも、すごく意地悪。

「だって、こんなにいっぱい人がいるところじゃ出ないもの」

「でも、したいんでしょ？」

「うう、したいけど……」

耳元で彼の囁く声が、私の耳にしみこんでくる。

「がまんすることなんてない。してごらん？ ここには僕しかいないと思って」

彼の声はますます優しくなり、私はそれだけでとろけてしまいそうな気持ちになつてしまう。その上に、彼は私をなでてくるのだ。私はもうぞくぞくとして体を震わせ、彼にしがみつきたくなつてしまう。

もう尿意は切羽詰つたものになつていて、私の身体は冷や汗が玉のようになつていた。固定された身体をもじもじと動かすことしかできない私は、ジンジンと呼吸のひと息ごとに水位と圧力を増していく下腹部のダムを懸命にささえていた。

「あん……でも、恥ずかしいもの。恥ずかしいもの」

「大丈夫といっただろう？ ぼくの声だけを聞いて、ぼくのほうだけを見ていれば

いいから」

すでに私の心はとろけていた。周囲の雑踏の騒々しさも、彼の声の前にその存在感を失っていく。その一方で追いつめられた私のからだ。会話の中ですらいおつめられたかわいそうな私のからだ。

ジンジンと、尿道口のあたりにせつない、もどかしい感覚がまとわりついて、文字通りいてもたってもいられない状態だ。もし身体が動くものならトイレの前で扉をたたき、半ベそをかきながら早く個室を空けてくれるように哀願したことだろう。

でも、ここにはトイレはない。ここは街中のベンチ。人々がせわしげに行き交う公共の場なのだ。私は高まり続ける尿意に、もう泣き出しそうだった。

(い、いじわる……ここは、みんなが通る道なのにつ)

街路樹の脇のベンチには、今は彼しか座っていない。気づく人はいないはず。私都在这里、おしっこしても、その音も、においも誰も気づかないはず。

でも、そっと下半身から力を抜こうとしてもきゅっと尿道括約筋がしまってしまい、放尿まで至らない。ヒクヒクと小さな穴がかすかに反応するけれど、じゅ

わ、と内側からの圧力が高くなると瞬間的に閉じてしまう。

当たり前前だった。恥ずかしいし、雑踏の中での排泄行為は、その。公衆道徳というものに反する。一般的な人間なら、本来隠すべき排泄行為を公道でなんてことは思わない。たとえ私が人々に認識されないとしてもだ。

「大丈夫だよ。見えないんだから」

そう。見えない。私を認識する人は、いないはず。でも、見えないからといってすぐに踏み切れる人はいないと思う。

はあ、はあ、はあ……。

いつの間にか呼吸がせつなくなっていた。太腿をもじもじとすりあわせ、身体をよじりながら、私はうっすらと汗に湿る肩を震わせ、いまにも弾けそうな下腹部を、張り詰めた膀胱を必死になって抑えつけようとしている。

それなのに、彼は意地悪だから。

見上げると、彼が微笑んでいた。彼には悪意はない。それがわかっているだけにたちが悪い。私はこの笑顔に抵抗はできても、最終的に勝ったことがない気がして。

彼が指を滑らせると、その振動が伝わってきて。それだけで脆弱なダムが決壊しそうなほどで。きつと、大雨で堤防に水が浸透しているように私の抵抗も限界がきているみたいで。

(も、もう我慢できない。本当につ)

私はもう泣き出しそうな顔で彼を見上げるのに、彼には私の表情は見えていない。それなのに、彼はいつもと同じように笑顔で、指を立ててみせる……。

「ほら」

彼がいたずらっぽいや、ちよつと意地悪な笑顔でコツン、と小突く。その瞬間、その刺激が私の限界。下腹部に力をこめてがまんしてきた、そのギリギリの緊張がついに破れてしまう。

「あ、あん、んん……」

私の無意識のうめきとともに、恥ずかしい音がした。私の閉じあわせることのできない両腿の間から、音をたてて水流がほとぼしる。膀胱から、尿道から、そして今まで健気にこらえ続けてきた尿道口から、放水の、排泄の甘美な快樂が全身に広がっていく。

シャアアアアッ……！

ついにダムを結界させた熱い水流が、狭い道を押し広げ外界に殺到する。その勢いはあまりに激しくて、何度もひきしめ止めようとする私をあざ笑うかのよう
に迸るのだった。

浮遊感とともに開放感が私のからだを震わせる。私のからだの奥から吹き出す
熱い水流は、かすかな音とともに吸い込まれていく。

（お、お外でお漏らしなんて……）

足元には、もしもの時のために吸収剤がしきつめられているのだ。でも、音は
完全にはおさえられないし、匂いもとめられない。

恥ずかしい水を噴出する尿道口から全身に熱さが広がっていく。ブルブルと全
身が震えているのは、開放の快感。ありえない行為の、それが報酬だった。背徳
の快楽に震えながら、必死で喘ぎを押し殺す。

「んんっ……あんっ……」

私は全身がくずれていくような開放感の中、声を押さえるのに必死だった。一
瞬だけ忘れていた周囲の雑踏が私の心をおしつぶす。

…私を見ている人はいない？ 不思議な、汚らしいものを見るような目をして
いる人はいない…？

嫌な想像が脳裏をよぎる。こんな恥ずかしい女がどこにいるだろう？ 私は自
問しながら、さらなる羞恥の渦に巻き込まれてしまう。繁華街の真ん中で、オシ
ッコをもらしてしまふなんて。しかも、命令されてするなんて。

…：かわいそうな、あわれみを込めた目で私を見ている人はいない…？
いやだ。見られたくない。気付かれたくない。私は唇をかみ、必死でこぼれる
喘ぎとうめきを押しつぶす。呼吸音もだ。おさえないと、誰かに、気づかれて…
…。

…：私の声…：気付かれちゃ、だめっ…：

私は目をかたくつむり、全身を震わせながら恐怖におびえていた。全身に吹き
出した汗が。私の体のそこかしこを伝い、流れる。うぶ毛を伝って落ちていくし
ずくの感触すら、快樂のさざなみと化して私の肌にしみこんでいく。

声をおさえるのに必死で、顔をそむけてぶるぶる震えている私。自分の呼吸音
でさえも信じられないほど大きく感じられる。見えないはずなのに。誰にもわか

らないはずなのに。 ……でも、見えてしまっているんじゃない？気づかれてしまっているんじゃない？そんな、そんなこと……！

ほんの一瞬だったのだろうけれど、私はくらくらと、脳を揺さぶられるような強烈な恐怖と恍惚感に支配されていた。そんな私の耳に入ってきたのは、彼の優しい声。かすかにいつもより高揚しているみたい。

「よくやったね。いいコだ。まわりをみてごらん」

残酷なせりふだった。私は顔をふりたくって拒否の声をあげる。

「いやっ！ 恐くて目なんか開けられない」

彼は私を優しくなでてくれた。意地悪だけど、とっても優しい彼の、とっても優しい手つき。さらさらと、かすかな音が私を少し落ち付かせてくれる。

「大丈夫。誰も気づいていない人なんかいない」

彼の手の感触に、私は少しずつ落ち着きを取り戻していく。

「本当、誰も気づいてない？」

「ああ、大丈夫。ぼくを信用して」

そうっと目をあけると、先ほどまでと変わらない、街の風景。人々がそれぞれ

自分だけの時間にしたがって生きている都会の雑踏。

「本当だったでしょ、僕のかわいいサナ」

彼が名前で呼んでくれた。私はそれだけで涙が出そうになった。彼はいつも優しいけれど、普段は決して私を名前で呼んでくれない。名前で呼んでくれるのは、何か彼の言いつけを最後までやり遂げられたときとか、よほど機嫌がよいときだけなのに。

「う……」

知らず知らずのうちに、胸がいつぱいになって、私は泣き出していた。しゃくりあげる私に、彼はあわてる。

「ご、ごめん。つらかった？」

「ううん、そうじゃないの。そうじゃないんだけど……」

彼は私をベンチから下ろし、手で引いて歩き始めた。樹脂製のキャスターがかさかな音をたて、アスファルトの凹凸が伝わってきた。オリジナルデザインの大きなスーツケース。それが私の今の姿だ。この中に人が入っているとは、まず思わないだろう。もともと手足を失った私が、なるべく彼に負担をかけずに一緒に

過ごすために作ってもらったもの。

中からは外が覗けるが、外から中を覗くことはできない。背中を除いて全面特殊加工のパネルが貼られていて、私は周囲を見渡すことができる。

私はこのスーツケースの中に隠されて、彼に連れ出されるのが好きだった。少なくとも、好奇の視線や、押し付けがましい哀れみの目にさらされることはなかったから……。

「本当にごめん。君を泣かすつもりなんか、これっぽっちもないんだけれど……」
彼が弁解する。まだ少しうろたえているので、あの完璧なまでに優しい甘い声じゃないけれど、こんな彼も、私は好きだった。

「涙を拭いてあげたいけど、家に着くまで待ってね」

「うん……」

冷静になってしまえば、このケースの中が外から見えるわけではないのだけれど、意識してしまうともういけない。今日は彼の意地悪で服を着せられないまま連れ出されてしまったから、なおさらだ。そのことを考えると、またからだの奥に変な感触が生まれそうになったので、あわてて振り払った。

スーツケースの中といっても、温度調整や換気などの機能が組み込まれ、肘、ひざまでもない私の手足をしっかりと固定できるように作られている。私にとっては乗り物などではなく、第二の肉体といえるほどにからだになじんでいるのだ。彼は足早に雑踏の中を進んでいく。彼に引かれて、私はその後をついていく。コロコロと、足元のキャスターが路面のかすかな段差を拾うけれど、しっかりとクツションのおかげで苦痛ではない。むしろ、心地よい振動にすら感じられた。耳元から聞こえてくる彼の荒い息遣い。私のために急いでくれているのが、彼の身につけたマイクを通して伝わってくる。私の胸は暖かいもので満たされている。

急ぎ足の彼のあとを、一所懸命についていく私。彼の腕をつかんで、ちよつとすねた顔で文句を言うの。私が息を荒げているのに気づいた彼が謝り、肩を並べて歩く。二人で、いつもの道を。

そんな昔の情景を思い出し、鼻の奥がつんと熱くなった。

第一話 お風呂で

1 日々のシゴト

うんしょ、うんしょ……。私は体をよじり、くねらせながらトイレの階段を上る。これは結構大変な作業なのだ。

普通はトイレに階段などあるわけないのだけれど我が家のトイレには階段がある。もちろん、私だけのためにだ。多分彼にはちよつとだけ不便だろうと思うのだけれど、二人の家なのだからしかたがない。

私はなんとか手すりにもたれながら、便座に座り込んだ。ふう。毎回思うが手足がないというのは不便なものだ。私の場合は、ひじ、ひざまではないうちでも、一応腕も脚もある。立つことも座ることもできるだけ幸せだ。なんといっても、少なくとも家の中では彼にトイレの世話をお願いしないで済むのだもの。

私は腕の先のリングに埋め込んであるマグネットを使って服のすそを持ち上げている。私が家の中で着るのは基本的にはワンピースで、すそにはマグネットを縫い付けてある。この方法に気がつくまでは、自分でトイレに行く時は下半身は完全にむき出しだった。……まあ、今でもパンツを履いたりはできないけど、普段大事なところを隠しておけるというのは大分都合がいい。

しゃあ、とおしっこが便器を叩く音がして、私はほおつとため息をつく。ちょっと弛緩したからだに放水の快感がしみこんできて、思わずからだをふるわせてしまった。トイレに入るのも私にはなかなかの大事業なので、つついっい我慢してしまう。

だから、我慢したあとの快感は、ちよつとだけご褒美なのかもしれない。なるべく回数を減らしたいから我慢するのだけれど、その分だけ開放感は大きい感じがするから。

最近のトイレは洗浄だけでなく乾燥までしてくれるので助かっている。おしりだって洗ってくれるしビデだってついていて。あれ？ 同じ機能だっけ？ まあいいいや。

私は手すりについているスイッチを操作してあそこを洗い、温風をしばし浴びた。このトイレがなかったら、私はどんなに不便な生活を送っていることだろう。このトイレも、私にも開け閉めができる扉も、みんな彼が用意してくれたもの。

この家の中は、私のために大規模な改造が施されている。もともとは高齢者向けのバリアフリーマンションを彼が分譲前から交渉して、私だけのために作ってくれたんだ。それを思うだけで、私は幸せな気持ちになる。

ほうぼうに私が上るための階段を配し、やわらかな色合いのウレタンマットを敷き詰めたこの家はどこか絵本の中の世界みたい。でも、そのみかけと違い私が暮らしていけるように隅々まで考えて作られている。

私の場合は、四肢が途中までとはいえ残っているので完全に四肢を失った人に比べればずっと自由がきいて、様々なことができる。

腕や脚の先にはリングをはめてもらってあって、これはベルトで私の身体に固定されている。このリングにはいろいろ仕掛けがあるので、おいおい説明していくチャンスもあると思う。

トイレから降りると、居間に向かった。朝のテレビドラマを見るのが、私の日

課。正直なところ、私にはあまりやることがないので、時間をもてあますことが多い。

私の時間の使い方はテレビを見ているか、お花を見ているか、パソコンを使っているかだ。

そのあとのワイドショーみたいなのは、見ない。だって、あんまり見るなって彼に言われたんだもの。耳年増になるぞ、だって。耳年増って、スゴイ言葉よね。

というか、前に見たこともあるけれど、なんとか毒があるというか、あまりよくないと思う。人の不幸とかばっかりに食いついていくのが、なんだかいたまれないから。自分自身がそういった番組とかに取材される側だったこともあり、普段はそういった情報から遠ざかっている。

それから洗濯物。これも一応私の役目。二人の服を全自動洗濯機に放り込む。

最近のものは乾燥機も兼ねているし、二人だけの服ならけっこうこれで間に合うのが嬉しい。横置きドラム型なら、私にもかろうじて扱うことができる。まあ、普通に比べて低い位置に設置されているので、彼にはちよつと使いづらくなつて

しまっているけれど。

お掃除はお掃除ロボットにやってもらう。部屋の本当のすみまではやってくれないけれど、何もやらないよりはずっといい。片付けておきさえすれば、お掃除ロボットの〇ちゃんがんばってくれるのだ。

最近はお所の洗いものも少しはできるようになった。といっても、食器を食器洗淨乾燥機に入れるだけなだけ。それでも慣れるまではお皿を何枚も割ってしまった。かなり凹んでしまった。大き目の機会を選んだので、ムリにお皿などをきっちり入れようとしなければ、身体の負担も小さいことがわかった。型式はキッチン下のスライド型。

シンクの中では私は掃除できないので、カウンターテーブルの上をウェットティッシュで拭く。

我が家では、私が拭けない大きなテーブルは、何かイベントがあるときしか使わない。こんな家を作ってくれた彼には申し訳ないけれど、大きなテーブルの真ん中まで拭くことは私にはできないの。

洗濯機から乾いた服を取り出し、たたむ。これだけのことがひどく大変だ。全

身を使って布地と格闘しなければ、服一枚たたためない。

一通り仕事を終えたときには私はヘトヘトになっている。以前の私は家事は苦手じゃなかったから、よけい悔しくて、無理をしてしまうのだと思う。将来彼のために食事を作り、お掃除、洗濯をするのは私にとってはごく自然な未来だったから。

くすん……。

仕事を終えて、手（義手）を洗っていたら涙が出てきた。鼻の奥も熱くなって、結局我慢できなくて泣いてしまった。手を洗うといっても、自動噴霧式のディスプレイとドライヤーを使うことが多い。自分の手が蛇口をひねることすら困難なことを思い知らされる。

肘関節と手首がないため、蛇口をひねることができないからバー型の蛇口なのだけれど、水量の調整がとても難しく感じる。人間が肘や手首、指をどれだけ日常的に使っているのかを作業のひとつひとつに思い知らされる。

肩が震える。ないはずの腕の感覚はあるのに、重さがない。軽く上腕をひねり、腕をもちあげるときの無意識の身体の位置の微妙なずらしも、ない。

だって、腕がないのだから重心が動くこともない。私の身長は女性としてはぎりぎり平均以上はあって。手足は太すぎるということではなくて。

私の手！ 力は強くなかったけれど、下手だったけれどテニスもバドミントンもできた手。お料理だってお裁縫だって、お母さんに習ったのに。手紙だって自分で書くこともできた。そして……彼に、彼に手を触れることもできた。

彼と指をからめ、誰かに見つかるんじゃないかと、ドキドキしながら川沿いの道を歩いた。小さいころは彼をぶったこともあったな。彼は一度も私を殴ったことはないけれど。

私の足。強くはなかったけれど、まあ細めで、そんなに悪くはなかったと思う。長距離を歩くと文字通り棒のように感じられるけれど、どこにでも私を運んでくれた足。

彼と並んで歩くこともできた。彼を家の前に立って待っていることも、彼を追いかけることもできた。今はもうない、私の足。

洗面台に水をためて顔を洗った。涙を彼に見せるわけにはいかない。自分ひとりでは何もできない、彼におんぶにだっこな私だけれど、だからこそ彼にはよけ

いな負担をかけたくない。彼には元気な私だけを見てほしい。何でも与えてくれる彼に、私があげられるのは、それだけだと思うから。

普通に顔を拭くのは難しいので、彼がピンチで下げてくれてあるタオルで、叩くようにして拭く。毛足の長いタイプなので、これでもけっこう水分がとれてくれる。

(今日も、いい顔でいかないとね)

料理もできないし、掃除もできない。家にいるくせに、家事のひとつもまともにできない私を、それでも優しく扱ってくれる彼のために、とびきりの笑顔を。

鏡に映るのはセミロングの髪にショート丈のワンピースの、どこにでもいるような女の子。でも、袖から覗く腕の先には手も指もない。足元だって、脛も、足首もない。

でも、私にもできることがあるはず。そう、私にできることは少しでも彼の負担をへらし、彼の心を支えてあげること。そのためには笑顔と元気が絶対に必要。

鏡の中で微笑んでみる。小さめの頭。薄めの唇。細い髪。化粧は私には無理だからまったく化粧っ気はないけれど、まあ、そんなに見れなくはないと自分では

思っている。

お化粧のできない私にできることは、ただ、いい表情で彼を迎えるだけにこり……。。

鏡の前でもう一度微笑んでみる。ちよつとうつむき加減で、彼からの目線で一番可愛く見えるように練習する。明るく、できる限りの笑顔を。正面からが可愛いかな？　せめて、彼が幸せな気分になってくれるように。彼のためにできるほとんど唯一のこと。

首をかしげ、甘えた表情。涙はにじんでいない？　表情が鈍くなっているかい？　私は自分自身をチェックする。うん、今日の笑顔も、きつと大丈夫。

……よしっ。今日もお迎え準備完了っ……。

2 お風呂で

「ただいま」

「お帰りなさい！」

私は元気よく彼を迎えた。玄関には「お迎え台」と私が勝手に呼んでいる踏み台がある。階段状になっていて、私でも上れるようになっていて。端末の通知で彼の帰りを知ると、私はそこで彼を待つ。この台に乗ると昔と同じ目線で彼をお迎えることができるから。

「帰ったよ」

いつも通りにキスをして、彼は私を抱き上げて居間に向かう。

「今晚は、鯖の煮つけと青菜のお吸い物、それから酢の物よ。あなたが作るんだけど」

「了解、ご命令お待ちしております、お姫様」

食材は高齢者や身体の不自由な人のための宅配サービスを利用している。作る

のは、彼。本来の主婦の役を果たすはずのである私は、情けないけれどほとんど指示を出すだけだ。それでも、数少ない二人の共同作業は楽しい。

宅配専用の保冷ボックスに入っている食材を彼が取り出す。いつもどおりの四大家族用の食材なので、半分だけ使って、あとは別の料理に生まれかわる。二日目以降、別の料理にする方法を考えるのが私の役目だ。

ありがたいことに、魚はさばかれた状態で届く。全体に半調理状態といってもいいくらいだ。こういった食材の宅配サービスがなかったら、私たちの生活はかなり大変だろう。

「はい、OKよ。あとは保温調理器に入れておけば大丈夫。それにしても、うまくなったわねー。とても若者とは思えない。まさに主夫ね」

「教え方がいいからさ」

恥ずかしげもなくそういう彼の言葉に、頬が熱くなった。今の私にはできることが少ないから、褒められるのはすごく嬉しい

「んー？　どうかした？　風邪でもひいてる？」

気づくと彼の顔が目の前にあって、私は真っ赤になってしまった。

「ち、違うの！ 何でもないの！」

クスツと笑って、彼は私を抱き上げ、私の髪に顔をうずめた。

「いいにおいがする」

「あなたのおいがする」

私達は笑いあい、お風呂に向かった。彼に抱き上げられて運ばれるのは気持ちがいい。それだけで気持ち軽くなり、暖かくなる。でも、たぶん彼は本当は大変じゃないかと思う。

いくら手足の半ばからなくなっているとはいえ、私の体重だってそれなりにある。それをこうやって抱き上げて運んでいるというのは、彼ってけっこう力持ち。

えっと、正確な私の体重は……その、やっぱり秘密にさせておいてほしい。

シャワーはともかく、お風呂に入るのは一人では危険なので彼と一緒にの時だけだ。もともとお風呂好きだった私にとっては、けっこうなストレスだったりする。なにせ、自由にお湯につかっていることもできないのだから。

そして、今でもお風呂は大好きだけれどちょっと困ることがある。身体を洗うのも、基本的に彼にお任せなこと。すごく恥ずかしい。裸の状態で、大好きな人

に身体を触られる。しかも、それを一切拒めない。わたしは、たいてい、濡れてしまう。

プラスチック製の椅子の上で、今日も私は身体を固くしてじっとしている。なぜかといえば、彼の手が気持ちいいのはよいのだけれど、気持ちよすぎるからだ。そして、彼は意地悪でエッチなことが好き。だから、なるべく反応しないように気をつけているのだけれど。

たっぷりの泡を含んだスポンジが白い肌の上を滑っていくとゾクゾクするの。彼の手が私の腕をとり身体の向きをかえさせる。それだけで身震いしたくなるときもある。

(んんっ)

思わず腕を身体にひきつけてしまう。

…：…なんでこんなにエッチなんだろう…：…。

一緒にお風呂に入っているだけなのに、私のからだは感じてしまう。エッチな反応をしてしまうのが、ひどく恥ずかしい。彼はいつもは気づかないふりをしてくれるけれど、消えてしまいたいほどの羞恥を感じる。お風呂に入るのは気持ち

いいのだけれど、このせいでちよつとだけ気まずい。

今日も、私は感じてしまっている。石鹸の泡にまみれて、滑らかな、ぬめやかな感触の中で。乳首が硬く、熱くしこっている。彼はそんな私の身体を丁寧に洗っていく。すばやくやさしく、けれど機械的に。

ぼつちりと硬くたちあがった乳首がスポンジでこすられる。敏感になっている乳房の上を、滑らかな泡に包まれたスポンジがすべる快感。ビリビリと小さな電流が弾けるような快感が皮膚を走り抜ける。でも、声を出しちやいけない。彼の私のからだを洗ってくれているだけなのだから。

私はもどかしい快感の中、身動きもできないままじつところえることしかできない。身体をよじることもできずに、かすかに肌を震わせらこらえる私。このときだけは、彼の冷静な態度がにくらしくなる。私がこんなに……。。

「さ、足を開いて」

「……」

いつもどおりの彼のセリフ。

「どうしたの？足を開かないと洗えないよ」

「で、でも……ぐすっ」

泣き声が出てしまったのには、自分でも驚いた。

「ど、どうしたの!？」

もちろん、彼は悪くない。悪いのはこの私。私がエッチなのがいけないのだ。

「ぐすっ。ごめんなさい。恥ずかしいから……」

鼻声でつぶやくように言うと、彼はクスリと笑い、私の身体を引き寄せた。

「シヤナがぼくのことを好きでいてくれてる、その証拠だよ」

彼の腕がそのまま抱きしめてくれる。石鹸でスルスルと滑らかに滑るお互いの肌の感触。身震いするくらい気持ちいい。しっかりと抱きしめられていても、お互いの肌がぬめやかな泡にコーティングされていて、ちよつとヘン。ちよつと肌を触れあわせるだけでも感じてしまうのに、こんなに抱きしめられたら感じてしまうのに。

「でも、こんな恥ずかしい、エッチな女の子、ヘンじゃない?」

「ヘンじゃないさ。ほら」

私の腿に、熱く固い感触がおしあてられる。びくん、びくんと脈打つように震

える男の子の体が、そこにあつた。

「あ……」

とつても熱くつて、ヒクヒクと震えている。私の太腿に触れているだけでせつなそうに。彼の反応に、からだの奥が熱くなってしまう。

第二話 エッチなこと

1 追憶と悪夢

幼いころから、思っていたこと。素敵な恋、感動的な結婚、幸せな家庭。比較的裕福な家庭の長女に生まれた私は、どちらかといえば、古いタイプの女だったと思う。

学校で家政科（家庭科ではないのだ！）を教えられたし、母や祖母からは家を

守り、夫や子に尽くすことを教えられた。もちろん、そのすべてを身につけたわけでも信じているわけでもないけれど、一般の女性に比べれば結婚や家庭への願望は強かったのかもしれない。

彼とするであろう将来の結婚も、幼いころからの半ば暗黙の了解だったといっているまいだろう。中学時代疎遠になったこともあったけれど、高校のころまた接近し、事実上の恋人同士となった。私にとって将来はおぼろげなものではあったけれど、幸せなものだと信じて疑うことはなかった。

子供のころとは違う彼の背中。身体の厚みにドキリとした。彼の声にふりかえった瞬間、こちらに向けられている笑顔に心臓が跳ね上がり、思わず言葉を飲み込んでしまった。マンガやテレビのように胸がドキドキして、全身が熱くなるような感覚。彼の腕に触れれば、筋肉や肌の滑らかで弾力に満ちた感触が幸せだった。

そして、彼も同じように思ってくれていると知ったとき、ふわっと身体が軽くなった。体重がゼロになって、文字通り空を飛べそうな幸福感を感じた。それは、それぞれの家族からも祝福された輝かしい未来へのパスポートだと思っていた。

彼と肩を並べて歩き、買い物をする。海へ、山へ。川へ、そしていろいろな遊園地や観光地に行き、月並みかもしれないけれど綺麗な景色を胸の中に収めるはずだった。

彼に抱きしめられ、そしてこの腕で抱き返し、そしていつかは新しい命をさずかり、この手でとりあげ、抱きしめる。そんな幸せをいつも願っていた。

それは私の未来のたぶん、すべてで。まじりけのない幸せな毎日が待っていると、かつての私は無邪気に信じて疑いもしなかった。

でも、私はその幸せを手に入れるすべを失ってしまった。山道で私たち家族の乗った自動車は、突如としておこった土砂崩れに巻き込まれ、山肌をすべりおち、押しつぶされた。それが、すべてだった。

∴それは地中を走っていた工業用パイプラインの破損、不十分な山止め工事、数日間に渡る雨など、様々な不幸が重なったのこらししい。事故を見ていた人物がいなかったため、救出が遅れたのだ。たまたま合宿で旅行に参加できなかった弟が届けなければ、私もこの世のものではなかったはずだ。

現場の状況が不安定だったために重機は出動できず、ヘリコプターだけでの作業は困難だったのだという。結局、組み立て式のクレーンなどがヘリコプターによつて降ろされ、私は押しつぶされ、ひどい炎症を起こしていた手足を切断されて救出された。事故からすでに20時間以上が経過していた。

母や父は即死だったという。私もほとんど意識を失っていたのは幸いだった。間近で命を失った両親といふことは耐え難いことだっただろうから。

結局私は両親の葬儀には参加できず、事件からまるまる一週間近くたって目を覚ました。そこにいたのは憔悴しきった弟と、目を真っ赤にして無精ひげもそのままにした彼だった。その時の私には、何もわかっていなかったとわかっていい。ただ、二人に心配をかけていたことだけがわかった。

「……！」

体の動かない私に二人はさすがにようにして泣いた。まだ麻酔が効いていたのか、心の動きは鈍かったけれど、彼らの声と涙の熱さがしみこんでくるのを感じていた。

彼らの涙が、より深刻なものであったことを知るのには、さらに十数時間後のこ

とだったが、私はもはや何も目に入らないほどに絶望し、沈み込んでいった。それからしばらくのことは、あまり思い出したくない。私はリハビリを拒否し、何度も自殺を図った。弟や彼。そして叔母や親族、お医者様達にもひどい迷惑をかけたのだった。

私が今ここにいられるのは、すべて彼のおかげ。一緒に暮らそうと彼が言ってくれても、私は信じる事ができなかった。それでも、彼はお父様やお母様を説得し、すべての準備をしてから私を迎えにきてくれた。ベッドに拘束されたまま、ガリガリにやせ細って、目を血走らせていた私を。

私はそれ以降学校に通うこともなく、彼と、最初は看護師さんたちとの生活は数ヶ月後、二人の生活に変わった。彼に下の世話をしてもらうのはとても恥ずかしかったけれど、家の改造でそれは乗り切れた。今の新しい家に移ってからはさらに快適に暮らせるようになった。

私は今の私なりに幸せになれたと思う。彼は幸せになれたのだろうか？彼は実家の事業の継承を弟さんをお願いして家を出てしまったのだ。約束された将来を、彼は私のために手放してしまったのだ。

彼の望みを、かなえてあげたい。心の底からそう思う。彼のために何かをしてあげることのできない私だから。彼が私に望むことは、何でも受け入れてあげたい。彼が少しでも喜ぶことなら、してあげられることならしてあげたい。今の私にできることなら、なんでも……。

眠っている彼の顔をみていると、せつなくて胸がしめつけられるような気がする。彼の帰りは早い。きつと、友達の誘いも断っているのだろうと思う。そう、すべては私のため。彼の帰りはうれしいけれど、ときどき彼の帰ってきたときのドアの音だけで涙ぐんでしまうことすらある。

ぴとっと彼の胸に頬を寄せる。とくん、とくん、と彼の命の音が聞こえる。彼の匂い。お父さんの匂いとは違うけれど、優しい、男性の匂い。彼のからだの厚み。私とは比較にならないほどがっしりとして筋肉のついたからだ。彼が毎日体を鍛えていることを、私は知っている。彼がそうやって汗を流している間、私も専用のトレーニング機器で体を動かしているから。

いくら私が小柄で軽いといっても、人一人の重さだ。決して軽い荷物ではない。

人が日常的に接することのできる重さとはちよつと言えないと思う。彼は私のため
めに体を鍛える必要を感じているのだろう。

2 寢床で

「どうしたの？」

彼の声がした。眠そうな声。

「ううん、なんでもないの。ちよっと目がさめちゃった」

「そう？おやすみ……」

彼はそう言って私の髪をなでてくれた。気持ちいい。幸せで、でも切なくて。彼の手を髪に感じていて、ただで体の奥がじゅわっと熱くなってしまった。

「ん……」

甘えるように彼の体に頬をすりつける。彼の体温がしみこんでくるみたいで、なめらかなパジャマの生地が頬に心地よくて、幾度も、幾度もすりつけてしまう。彼のそばは暖かくて、それだけで心も身体も温かく、ふわふわとした気分になれる。

ぴとっ……。

彼の身体に自分のからだを重ねるようにして。彼という木の幹にからみつく蔦のようによりそって、ただそこにいるの。それが今の私の望み。

それだけで、すごくしあわせ。彼の体温を感じているだけで幸せな気持ちになれる。

なんだかとろけてしまいそうな、じんわりと暖かい感じ。彼のそばにいるというのは、それだけで魔法のようなもの。私にとっては、唯一絶対の魔法。

でも、じきに彼はまた規則正しい寝息をたてて眠りについてしまう。私は、といえば体の奥のじゅわっと熱くなってしまう部分を意識してしまって寝れなくなってしまうた。

肌の敏感さが急上昇して、かすかなふれあいにも電気のような鋭くも鮮烈な刺激となって身体の中を走り抜ける。彼とふれあっている部分が、むずむずするよ
うな不思議な感覚で、そこが熱を持っているような気がする。

彼にもっと触れたい。彼を感じたい。そうすればこの体がじんじんするようなもどかしい熱さから開放されるような気がする。

でも、私のために一日中働きづめの彼を起こすことなんて、できはしない。彼

をこれ以上私のために何かさせるなんて、ありえないと思う。今の何もできない私を大事にしてくれているだけで、それだけでうれしくて、ありがたくて、彼の思いを、愛情を感じる事ができる。この家にいるだけで、彼の愛情に包まれているのを感じられるから。

それなのに、私のからだは彼を求めていた。彼の柔らかなてのひらの優しい感触を。やわらかすぎた溶けてしまいそうな唇を。なめらかな肌の感触を、もつともつと感じたいと思ってしまう。

どうしよう……。。

なんだか熱くなってしまった身体は、わずかな動きでしびれるような快感を発生して私を驚かせる。全身の肌の感度が上昇してしまったようで、彼と触れている部分がなんだかざわざわとする。さざなみのような快感がじわじわと全身にしみこんでいくのを感じる。

当たり前だが、手のない私は普通に自分を慰めることができない。疲れている彼を起こしてしまうわけにもいかないし、途方に暮れてしまった。胸の先端では乳首がピンと起立してしまっているし、乳房が熱く、重い。

なんだかもどかしくて、身体をよじるとシーツの柔らかな生地が気持ちよくて、思わず声をあげてしまいそうだった。でも、その気持ちよさはどこかいつもと違っていて。体をもっと熱くさせて、体の奥をとろかしてしまおうような、そんな感触だった。

身体をシーツにすりつけると、突起した乳首がヒリヒリするように熱くて、もどかしさはさらに強く感じた。もっと、もっとこの熱さを感じたい気がする。

やだ、私、欲情しちゃってるんだ……！

そう自覚した私は、すっかり敏感になってしまっている自分の体に驚いた。あたりまえだ。手足がないぶん、残りの部分が敏感になるのは当然のこと。でも、エッチな気分のときにまでそうだとはい、今まで意識したことがなかった。

彼の寝息を聞きながら、体をもぞもぞと動かした。今この身につけているのはシャツ一枚だけだったので簡単にめくれあがってしまう。太腿やお腹だけでなく、ぽっちりとした熱くしこった乳首がシーツにこすりつけられる。

きもち、いい……。

小さなつぼみがふくらんで、開いていくような感覚。熱く、固く、大きくなっ

た乳首が普段とはまるで違い鋭い感覚を走らせる。それはぎれもなく、エッチな感覚。はしたない、恥ずかしいと思いつつも、身体の奥の方が熱くなっていくのを感じる。

身体をよじる。それだけで吐息がせつなく、熱くなるのがシーツに吸い込まれていく。胸もおなかも、脇腹も、なめらかで冷たいシーツにこすりつけるだけで気持ちよくなってしまふ。

それは無意識のうちのことだったけれど、増幅する快感に自分が悦楽を積極的に感じようとしていることを思い知らされる。柔らかなシーツの生地。空調の効いた部屋の中で、私の吐息がやけに大きく響く。

はあ、はあ、はあ……。

いつの間にか、息が早くなっていて、彼のそばでのいけない遊びを止められないのを感じる。彼を起さないように、声が出ないように気を付けながら、もぞもぞと身体をよじり、肌をこすりあわせる。

すりすり。

肩を、胸を、おなかをシーツにこすりつける。ただそれだけの行為がひどく気

持ちよくて、身体の奥の熱さがだんだん大きくなり、溶け出して全身を熱くしていく。おなかの奥が、下腹部の一部が熱く、柔らかく、湿っていく。熱く濡れていく感覚は恥ずかしいけれど、それだけで背筋がゾクゾクするような快感だ。

じゅわつととろけるような感覚は快感とともに大きくなっていく。

「ん……」

気をつけているつもりだったのに、思わず声をあげてしまっていた。小さなものだったと思うけれど、確かな『声』だ。羞恥に全身が燃え上がりそうだった。でも、顔を隠す手も、部屋の隅に逃げ出す足も今の私にはない。

じゅん……。

腰の奥の大事な部分が収縮した。内臓感覚というのだろうか。からだの奥までも、このささやかな、けれど恥ずかしい感覚に反応していた。私の身体の女の部分が潤い、その潤みがじゅわりと表面に染み出してくる感覚。

ほんのわずかな液体が、私の敏感な部分ににじんでいるのがわかる。彼の安らかな寝息が聞こえるそのすぐそばだというのに。私の身体は女の恥ずかしさを隠せなくなっている。

…やだ、私、すごくエッチだ…。

そう気づいた私の頬は、多分真っ赤だったと思う。大体、彼が眠っている横で何をやっているんだろう。もうやめなくちゃ。

そう思っている間にも、二の腕がシーツにこすれた。脇腹が、太腿が柔らかなシーツの感触にびりびりと震えてしまいそうだ。敏感になってしまった肌はどこに触れても快感としてとらえてしまうようで、からだの恥ずかしい反応はそのたびにじゅわり、じゅわりと女の部分をとりかき、潤ませていく。

はあ、はあ、はあ…。

いつしか呼吸が荒くなっていた。速く、浅い呼吸。ちよつとしたはずみでうめきとなり、恥ずかしい声が出てしまっそうだ。

もう、もうやめなくちゃ…。

そう思って太腿と二の腕で身体を支えようとした瞬間、すべってしまったからだは柔らかなシーツを全面で感じてしまう。今の私には危険な刺激だった。

「あ、んん…。」

私の控えめなふくらみの先端で、起毛されたシーツのやわらかくも滑らかな感

触が敏感な突起を直撃。すでに勃起して一回り大きくなっていた乳首が柔らかな刺激の中で鋭い快感信号を全身に発している。

気持ち、いい……。

ふかふかのベッドの上で身体をくねらせると、火照った肌に冷たいシートが心地よい。それだけのはずなのに、過敏になったからだは恥ずかしい液体を分泌してしまふ。

もうやめないと、彼が起きちゃう……。

学校でいっぱい勉強して、しかも家事をして。疲れている彼を起こしたくない。しかも、私の恥ずかしい行為でなんて、絶対だめだと思う。

それなのに、荒い呼吸はますます早くなり、体温になじんだシートがまた一味違った気持ちよさで私を刺激してくる。時折彼の肌に触れると、まるで電流が走ったような快感に思わず声が出てしまいそうだ。

ちゅぷ……。

ついにその時がきた。潤ってしまった私の恥ずかしい部分からかすかな水音がしてしまった。女の部分が反応してしまっている。

やだあ、濡れちゃってる……。

花卉はしつとりと露を含み、ほころび始めている。それがわかってしまった。女性の秘めておくべき器官が羞恥を含み、じつとりと濡れてきている。

快感をもっと増幅させたい私は、無意識のうちに身体をよじり、全身でシーツの優しく柔らかい感触を味わっていた。

気持ちいい、気持ちいいよ……。

ぼつちりと突起した乳首がもどかしくもせつない快感に震える。二の腕で乳房をつぶすようにして刺激すると、柔らかい乳房に沈み込みながらも反発する感触に、乳首、乳房、それに二の腕のすべてで快感があわ立ち、そして弾ける。

こんな恥ずかしいこと、だめなのに……。

そう思ったけれど、体はもう少し、もう少しとこのちよつとだけ背徳的な快楽をむさぼってしまう。

太腿をすりあわせれば、それだけで気持ちいい。両腿の間に挟まれたシーツの起毛された表面がゾクゾクするほどの快感となって私の全身を震わせる。

今、ここに手があれば迷うことなく、乳房をすくいあげ、やわやわともみしだ

くだらう。きっとそれだけでもせつない快感が私の呼吸を断ち切り、声を震わせ
る。先端の敏感な小突起をつまみあげ、指でころがせばヒリヒリするような熱い
刺激が乳房から全身にしみわたるだろう。

でも、私には手も指もない。できることは、かろうじて存在する二の腕で乳房
をこねまわし、撫で回すだけだ。でも、情けないことにそれですらも私の恥ずか
しいからだは敏感な反応を示してしまうのだ。

はあ、はあ、はあ……。

足を膝の上から失ってしまったっている私は、うまく足で体を支えることができな
い。重心の問題もあってか転がりやすく、特に横になっているときはバランスを
とりづらいのだ。体を起こそうとして、またベッドマットに倒れこむような形に
なってしまう。

起毛されたシートに乳房が優しく包まれる感覚にぞくぞくする。先端の乳首が
こすられて、敏感な突起がもどかしくもせつない快感が乳腺を通じて乳房全体に
広がっていく感じた。

なんで、こんなに気持ちいいの……。

からだをくねらせれば、髪の毛がうなじや肩に触れるのも気持ちがいい。普段は彼に撫でられて感じるばかりの髪の毛が、今や私の肌を感じさせていた。サラサラと髪が肩をなでる感触に、彼の手が撫でてくれる感触を思い出してさらに感じてしまった。

じゅん……。

私の中で何かが溶けた感触。下腹部の奥のほうで、きゅん、と収縮する感覚とともに熱くとろけるような蜜が、私の女性器官を潤していく。粘膜がより柔らかく、より感じやすく変化していく感覚にクラクラする。

「んんっ、あ、あん……」

おでこで体重を支えて腰をよじれば、乳房やお腹、それに太腿が快感を訴えかけてくる。全身に快感の粒々がつまっついていて、ちよつとの刺激にもそれが弾けて快感が小爆発を起こしているみたい。

悦楽。肉悦。ううん、違う。これは私のからだだが求めているんだから、やっぱり肉欲。肉欲が私をつき動かしていた。

ああ、今私に自由になる手があったなら。満足な指があったなら太腿の間に差

し入れ、もつとも敏感な部分を探っていくのに。

彼の指が、手のひらが全身を撫で回していく感覚を思い出しながら。柔らかく、どこまでも密着する唇を思いながら。耳をくすぐる彼の低い声を想像して。私の指が潤った花卉に触れ、つまみ、そして熱い肉の狭間にもぐりこんでいくのを想像する。

はあ、はあっ、はあっ……。

空想の中彼の唇が耳たぶに触れ、ちゅっと音をたてて吸う。それだけで電気が走るような衝撃が私の体を貫く。やさしく髪を撫でられるだけで頭皮から首筋、背筋へとさざなみのような悦楽が広がっていくというのに。

ねえ、起きて。起きて、私を……。

私を可愛がってほしい。その言葉は、意味を成さないあえぎのまま夜の部屋の暗がり溶けていく。押さえきれないうめきと一緒に。

「……く、ん……」

私はいつのまにか、シーツの端を口に含んでいた。声が出てしまいそうだったから。両ももの間にはシーツを挟んで、こすりあわせるようにして、直接刺激で

きないもどかしい感覚を味わう。

心の中で彼の名前を呼びながら、いつのまにか私はこのいけない行為に没頭していた。熱く張り詰めた胸を冷たいシーツにおしつけて悶え、腿の間のシーツをすりあわせてエッチな部分を刺激して喘ぐ。

たったこれだけのことですら、私の官能はさらに燃えあがってしまふ。熱い吐息をシーツに含ませながら私は身体をくねらせ、悦楽に身をささげていた。

はあっ、はあっ、はあっ……。

熱い吐息がシーツにしみこんでいく。淫らなあえぎが、空調の効いた部屋の空気に溶けていく。エアコンの気流がうぶ毛を震わせるのすらもが気持ちよくて、私はからだをよじらせながら肌を震わせていた。

もう私の目は何も見ていなかった。まぶたを閉じたまま、彼の与えてくれるさまざまな優しくして好ましい刺激を想像しながら、空想の中にしか存在しない自分の指で自分を慰めていく。

ぽっちりとしこった乳房の中心の突起を指に挟んで転がされながら。撫でられた髪が肩から首筋に流れ、彼の頬がそれをかきわけながら接近してきて。熱い吐

息が感じやすい肌を震わせる。

乳房をもみあげる指が軽が蜘蛛の足のようにとりつき、弾力を楽しむようにして小刻みに、軽く食い込ませていく。ヒリヒリするような熱さがこもる乳首は中指の先端に捉えられたまま逃げ場がなくなつて、私のあえぎは彼の思うがままにコントロールされてしまう。

可愛がつてほしい。全身を、優しく、でも激しく……。

自分のからだのはずなのに主導権なんてまるでなくなつて。彼の思うがままに、されるがままに快感レベルは推移していく。

「……っ」

彼の名前を呼んでしまった。今度は心の中だけじゃなくて。声に出してしまった。せつなくて、どこか追いつめられてしまったような詰まった声だ。

彼の名前を呼べば、私の名前を呼んでもらえる。ささやけばささやくほど優しい手が、ちよつと意地悪な手が前進をなで回し、濡れてとろけてしまっている部分をかきまわし、エッチな快感を味わわせてくれる。彼の名前は、こうして、呼んでしまえば。せつない呼吸をおしのけて、呼んでしまえば……。

第三話 おみやげのある日

1 彼のおみやげ

彼は時々おみやげを買ってきてくれる。腕も脚もそのかなりを失った私へのおみやげは選ぶのに苦労していると思うのだけれど、もらえるとても嬉しい。大抵はお菓子とかで、たまにちよつとしたアクセサリーなどなのだけれど……。

今日は違った。

「ただいまー」

「おかえりなさい」

いつもどおりお迎え台から抱き上げられた私は、居間まで彼の胸に抱かれたまま運ばれていく。彼がちよつと大きめの紙袋を提げているのに気がついていたら私

はさつそく彼に訊ねる。

「ねえ、今日は何を買ってきたの？」

「いいモノ」

彼はそっけなく答えるけれど、表情は笑っている。よほど楽しみなんだろうな。服だろうか、それとも本？

「えー、教えてよ」

私は彼の首筋に顔をすりつけながら甘え声でねだる。彼は苦笑しながらクツシヨンの上に私をおろした。見上げる彼の顔はいたずらっ子みたい。

「早いほうがいい？」

「もちろん！」

私は自信満々で答えた。だって彼がこんなに楽しそうなら、きっと私にも楽しいことだと思ふから。彼は得意満面でお茶を入れると私の視線に答えるようにして紙袋をテーブルに上げた。

「ねー、はやくしてよお」

「お茶くらい飲ませろってば」

彼は私にもお茶をすすめてくれる。私はストローに口をつけながら上目遣いで彼を見つめた。苦笑いする彼。彼はオーケーと答えると、さっそく紙袋から包みを取り出し開け始めた。中から出てきたのは……。

「なあに？ これ」

ヘアバンド？ でも、変わった飾りがついている。ええと、これは。

「サナの耳。ネコミミならぬイヌミミ」

彼はそう言って、私にそのイヌミミをつけてくれた。ちよつと垂れた耳で、カワイイかも。というか、すごくカワイイ耳だ。

「ほら、鏡見て」

彼に言われて差し出された鏡を見た私はドキッと心臓が跳ね上がるような気がした。みるみるうちに脈拍が速くなっていくのがわかる。ロングの髪の間からぴよこん、と顔を出した垂れ耳。茶色がかった私の髪と白と黒のブチの耳が奇妙にマッチしている。

でも、鏡に映った私の姿は、まるで……。

「よく似合ってる。可愛いよ」

もともと幼い顔つきといわれる私には、イヌミミはよく似合っていた。すごくカワイイ。それは本当。けれど彼に抱き上げられて鏡に向き合っている私は、私の姿は……。手も足もなく彼に抱き上げられてイヌミミをつけている若い女の姿は、ほんとうに……。

「どうしたの？ 気に入らなかった？」

「ううん。可愛いけど、ビックリしちゃっただけ」

精一杯さりげなく答える私の心臓は早くも大きくうっていった。

「ふーん。ちよつと待ってね。服もあるんだよ」

私はびっくりした。服？ 服って？ 意味がわからないでいる私の前に、レオタードみたい体にぴっちりとした服というか、コスチュームが広げられる。ブチ犬の衣装らしい。

彼は嬉しそうに、私にその服を重ねてみせた。なんだかすごく小さな服のようだ。

「ほら、脱いで、脱いで」

もとからたいした服を身につけていない私は、あっさりと丸裸にされ、そのコ

スチュームを身につけさせられてしまった。体にピッタリとしていて、ラインがはつきりと出てしまうのが恥ずかしい。

手足を途中から失っている私は一度着た服を脱ぐこともできない。ましてやこの服はホックでぴっちりとはめられてしまっている。身体にぴっちりフィットした、レオタードみたいな衣装だった。

布地が薄いので、乳首の形も浮き出してしまう。救いは、上等な布地のおかげで肌触りは悪くないことだ。

「うー、なんだかエッチな衣装」

「くすつ。そりやそうさ。そーゆーお店で買ったものだし」

私は目を丸くしてしまった。

「えーっ！？そんな趣味あったの？」

「サナを可愛がってあげたくてね。今日はエッチな気分なんだ」

ぼっと何か燃え上がるような、そんな感覚。私は真っ赤になってしまったと思う。思わず彼から体を離そうとするけれど、彼は私をしっかりと捕まえていた。

「や、やだ」

「なんで？ほら、こんなに可愛いのに」

私を抱え込んだ彼は、私のひじ、ひざまでない手足にキャップをはめていく。もちろん、犬の足を模したものだ。私の心臓が、また大きな音をたてた気がした。

「ほら、これで完成だよ」

床に降ろされた私はバランスが取れなくて思わず手をついてしまった。すぐに起き上がろうとす顔をあげた私の目に入ったのは。サイドボードのガラスに映ったのは……。

普通ならありえない、小さな人間？ いや、そんなものじゃない。犬の前足、後ろ足、イヌの耳。ブチの入ったレオタードみたいな服。それで、手足を床についている私の姿。

……可愛いのもかもしれない。けれど、けれど、けれど！

それらを身につけた私は、四つんばいになっている私の姿は、犬……犬そのもの。そこにいるのは、人間に似た犬にすぎないようにすら見えた。白と黒のブチ犬。垂れ耳がたしかに可愛い。このレオタードみたいな服だって、手足のキャップだって。すごくよくできていて、しかも可愛いものだ。でも……。

めまいを感じた私は、そのまま姿勢を崩して床に突っ伏してしまふ。ショックのあまり息をするのも忘れていたようだ。

私はしばらく、文字どおり息をすることも忘れ、肩を震わせていた。涙が頬をつたい、柔らかい素材の床に落ちてかすかな音を立てる。

「サナ？ どうしたの？」

彼の優しい声すら私には遠く聞こえる。今の、何一つ満足にできない自分。一人前のことはおろか、日常生活すらままならない、今の私の姿。手足を失った私は、まるで人間らしい作業はできないのだから。

「うう、ぐし、ぐすつ。ひどいよ！ 私、人間だもの！ 犬じゃないのに……！」

私は声をおさえられなくなり、しゃくりあげながら泣き出してしまった。彼が狼狽した態で手をさしのべてくるけれど、今の私は受け入れることができない。自分でもおどろくほどの激しさで彼の手を弾いてしまふ。

「ひどいよ！う、ううっ……こ、こんな、こんな格好、させるなんて」

「サナ……」

私は彼の手を振り払って泣きつづけた。何度も彼の手を振り払い、彼の言葉を拒否して。ふと気がついた時には、背中に彼の気配が感じられなくなっていた。

「ぐすつ……」

不安を感じた私は顔を上げ、彼の姿を探した。彼を傷つけてしまったかもしれない。そう思うと心が痛んだ。多分、彼には悪気はなかったのだろう。でも、私が傷つけば、彼も傷つく。一緒に暮らしている二人にとってはあたりまえのこと。どちらが悪かろうと、傷つくのは一人じゃない。

でも、彼の姿がない。背筋が寒くなるような喪失感を感じながら必死で彼の姿をさがす私。声は出なかった。もし声をかけて、彼が答えてくれなかったらと思うと口を開くことすらこわいのだ。

「ごめん……」

その声はすぐ近くから聞こえた。彼は私の目の前に両手をついていた。習慣的に見上げて探していた私には彼の姿が目に入らなかったのだ。彼は床に額をすりつけるようにして謝罪の言葉を繰り返す。

「ぼくが悪かった！　こんなに君を傷つけるなんて思っていなかったんだ」

彼の体はかすかに震えている。握り締められた拳は色が変わっていてこめられた力の大きさがわかった。

「ぼくがはしやぎすぎていたんだ。許してくれ」

私は無言で彼を見つめる。彼はよほどショックを受けたのか、顔を上げようとしめない。そのあとは彼も続けることができなくて、しばらくの間壁にかかった時計の音だけがやけに大きく響いていた。

普段ならありえない、異様に静まり返った居間に手をつく彼。沈黙が重くて……私には重すぎて、私はやがてささやくように言った。

「あなたは……わかっていて、わかってくれていると思っていたのに」
ハッと息を呑む音がして、わずかな躊躇の気配。

「……何といわれてもいい。許してほしいんだ。サナ、君を愛している」
愛している。その言葉を疑ったことはない。それは紛れもない彼の真実。

「ねえ、教えて？」

彼はようやく顔を上げた。私はささやき声で訊ねる。細かく区切った、ちよつとかすれた別人のような声が出てしまった。

「なんで、なの？ 何か、理由があるんでしよう？ 教えてほしいの」

理由のいかんによつては、とは言えなかった。でも、でも、場合によつては、彼を失うことになるかもしれない。私は今、心底おびえているのだ。私だってもちろん彼を愛している。けれど、それだけではやっていけないこともある。愛だけで二人の関係を語ることはできないのだから。

しばし迷った末、彼はかすかな声で言った。

2 チロ

「……になってほしかったんだ」

彼の声は小さすぎて、よく聞き取れない。私は恐怖すら感じながらも、彼にもう一度口に出してもらわなければならぬ。

「ごめんなさい。聞こえないわ」

彼はかすかに躊躇してから、こんどははっきりと口に出す。

「……チロになってほしかったんだ」

チロ？ その名前には聞き覚えがあった。確か……。

「覚えてない？ ぼくが昔飼っていた犬。高校のころ死んじゃったけど」

もちろん覚えてる。小さいころにも一緒に遊んだ記憶がある。おとなしくて賢い犬だった。私が中学のころ疎遠になっていた彼との仲を繋ぎ止めていてくれたのは、チロだったと思う。そのころはもう老齢で、私が高校に入ってじきに亡くなってしまう。

「チロって、あのチロのこと？」

「そう。友人とその手のショップにいったら、いろいろな衣装があつてさ。たま、それがチロに似ている気がして……」

彼は意気消沈したまま、ボソボソと続ける。

「君もチロとは中がよかったしさ。喜んでくれるような気でいた」

彼がチロをすごく可愛がっていたのを思い出す。私は彼を見ているのに、彼はチロのほうばかり見ていたような気がして。彼はあとで照れくさかったからだといつてくれたけれど、私はずいぶんチロに嫉妬した記憶がある。

「何度でも謝るよ。ごめん、ぼくが無神経だった」

私は彼に体を寄せた。長さの足りない腕で彼の頭を抱きしめる。腕に彼の涙が触れてちよつと冷たいけれど、私の胸の中に、確かに彼がいる。私と同じようにおびえながら。

「反省した？」

「うん」

彼の答えは簡潔だった。私はさらに顔を寄せる。そして、小さな声で。

「私を愛してくれてる？」

「もちろん」

「私を抱きしめてくれる？」

彼は無言で私を抱きしめた。私にすぎりつくように。大の男が今の私にすぎりつくようにして抱きついている。正直いって人に見せられる姿ではないけれど、私を抱き上げようとしないう彼の心づかいがうれしかった。

「じゃあ、許してあげる」

「サナ……？」

私は彼の頬に唇を押し付けた。それから、彼の頬に鼻をすりつけ、ペロリと涙のあとを舐めとる。ちよつとしよつぱかった。彼の涙を見るなんて、私がこんな身体になって以来かもしれないと思うと、なんだか不思議だった。

「それから、今晚だけ、一度だけチロになってあげる」

彼の体が硬直した。彼の鼓動がひときわ大きくなったようだ。

「い、いいの？」

「そのかわり、本当のチロより可愛がってくれなきゃ、イヤ。だって、あなたい

つもチロばかり可愛がっていたから、私は嫉妬していたくらいなもの」

「うん、うん……」

なんだか彼の心臓がバクバクいつているのが伝わってくるみたいな気がする。

「あのね、さっきすぐくシヨックをうけたのは、多分、チロに似てたからだと思うの。私にとってもチロはすぐく近い犬だったから」

私の胸もすぐくドキドキしてる。これは彼にも伝わっているはずだけれど、彼はじっと私を抱きしめるだけ。彼の体温を感じながら、私は自分にできるかぎりの優しい声でゆつくりと続ける。

「だから……逆に、チロなら、いいんだ。私、チロみたいにあなたに可愛がってほしい。チロといるときは、チロに勝てないような気がしていたんだもの」

「そんな、そんなことないさ。チロはチロ。サナはサナなもの」

でも、彼は私といるときよりも、チロといるときの方がデレデレしてた。私と二人きりのときよりも、チロを相手にしているときのほうが、ずっと無防備で、なんだかかわいくて……。

彼の指が私の背中中で熱を持っている。彼の顔は私の腕の中にあるけれど、私に

は彼の頬をなでてあげることすらできない。彼の髪にからめる指も彼のほほをつたう涙をぬぐう掌も、私には、今の私には……。

……ごねんね。大好きなあなた。ごめんね。彼を抱きしめることのできない私の腕。

しばし抱き合ったのち、私たちはシャワーを浴びて、食事をとった。ちよつとだけぎこちないけれど、いつもの二人に戻ることができた。ちよつと時間が遅くなくなってしまったので簡単なものだけだったけれど、とても重要な時間だったと思う。

彼の服装は、シャツとジーンズのパンツ。昔、チロと散歩に行くときとそっくりのシャツだった。

「さ、さあ、始めようか」

「う、うん」

ぎこちない二人。無理もない。私たちはコスプレ……コスチュームプレイをするのは初めてなのだから。とりあえず決めたルールは三つ。

一つ。私サナは彼の言うことを聞くこと。ただし、どうしてもイヤな場合は申し出ること。

二つ。私サナはなるべく犬の……チロの真似をすること。犬の鳴きまねもすること。

三つ。彼は、私が本当に嫌がることはしないこと。チロにした以上に私を可愛がってくれること。

不思議な興奮の中、彼は私に服を着せ、アクセサリーをつけてくれる。なんだからいつもよりかいかいしくて笑ってしまった。

私を着替えさせる彼の手はすごく慣れていて手早いけれど、風変わりな衣装のおかげでちよつとだけ手間取った。

まず、ブチ犬風のレオタードみたいな衣装。それからヘアバンドみたいなイヌミミ。手足につける犬の足みたいなキャップ。どうやらこれは特注品らしい。私の手足にぴったりに作られている。

「可愛いよ、サナ」

「うー、可愛いけど」

確かに可愛いかもしれないけれど、すごく恥ずかしい格好。だって、衣装は薄くてからだのラインがまるわかりだし、胸のあたりもパッドが薄すぎて乳首がわかってしまう。

「テレビアニメやマンガ雑誌の中みたいな格好だわ。ちょっとエッチすぎるけど」
「本当に可愛いんだから、いいじゃない」

彼は私を抱き寄せて、髪の毛と背中をなでてくれる。うー。恥ずかしすぎ。これぐらいじゃごまかされないんだから。でも、彼に撫でてもらうのは、いつでもすごく気持ちいいんだ。すごく、好き。

「あ、ちょっと待ってて」

彼は棚をゴソゴソやって、何か小さな箱を出してきた。

「なあに、それ？」

「チロの首輪とリード。いつも使っていたのはチロと一緒に燃えてしまったけれど、これはよそ行きの特別なものだったんだ。かなり余裕があったから、たぶん……」

「えー？ 首輪までするのー？」

「だって、チロになってくれるんでしょ？」

私がおもいおもいしている間に、赤い首輪が巻かれ、止められてしまった。キュツという皮のしまる音が私の胸を締め上げる。なんだか、首輪を締められた瞬間、心臓をぎゅつとつかまれたような気がした。ドキドキと、動悸が早まっていくのがわかる。

「うん。大丈夫だね。それからリード」

戸惑う私に対して彼はすごく嬉しそうで、私は困ってしまふ。まるで子供みたいに無邪気な笑顔に、私は逆らえない。ああんつ、コレが彼の武器なのにつ。

「うー」

上目遣いで彼をにらんでやったけど、身体が動かない。彼の手が再び伸びてきて。

「ほら」

カチリ、という金具の音。私のブローイングにもかかわらず、私の首にリードがつながれてしまった。チャリン、とリードと首輪をつなぐ金具の音がやけに大きく聞こえる。

なんだかゾクゾクする。これは多分、背徳感。首への拘束はそんなにキツくないけれど、なんだかすごく無力感を感じさせる。ガラスに映った私の姿はなんだか、ちよつとはかなげで……。確かに可愛いのかもしいけれど、なんだかせつない。

あれ、でも、この首輪。なんだか見覚えがある。

「ねえ、私が会った時、チロはいつもこの首輪していたような気がするんだけど」
「だから、それは特別な……あ！……まあ、いいじゃないか、特別なんだから」
そういう彼の顔は赤い。えへへ。どうやら、当時の彼にとっても私は特別だったみたい。こんな時ながら、私はうれしくなってしまった。同時に、そんなときですら特別なよそ行き用のおしゃれを用意されていたチロが羨ましい。今だって、彼に思われている。

「おいで、チロ」

ざわっ。私の中で何かがうごめいた。彼の優しい呼び声。これだけで背筋がゾクゾクする。彼が私を呼んでいる。チロでも、いいの。私を呼んでくれているなら。

「チロ？」

「わんっ」

私は彼のひざに上がり、彼の胸にもたれかかる。彼は笑いながら私の髪をなでる。クンクンと鳴きながら彼の頬や首筋に鼻を押し付けてあげる。

「甘えんぼだなあ、チロは」

懐かしい、ちよっとテレているけれど、デレデレの笑顔。甘えんぼなのはどっちよ？ そう思いながら、私は彼にしがみついて、ペロペロと頬をなめてあげた。

「なんだ、散歩に行きたいのか？」

「わんわんっ」

ごっこ遊びだとわかっていても、ちよっとせつない。チロはもういないのだから。でも、あの時の笑顔が私に、私だけに向けられている。チロへの申し訳ない気持ちと、彼を独占しているという喜びが私の中でせめぎあう。

「そら、行くぞ」

彼がリードの端を持ち、私を促す。私はなれない犬の足のキャップに戸惑いながら歩き始めた。家の中だけの、まさにごっこ遊びの散歩だけれど、首輪につな

がれての、四つんばいでの散歩はいかにも頼りなく不安な気持ちにさせられる。それに、その、女としてすごく無防備な姿勢なので、よけいにそう感じるのだと思う。

…私、つながれちゃってる、ホントの犬みたいに…。

(終わり)

箱の中の私（体験版）

2022年8月16日 初版

著者 巨道空二

© 巨道空二 2022

箱のなかの私

壺